

—— Let's embark on a journey to discover our own “perspective on the Lotus Sutra”！

（“法華経観”を見つける旅に出よう！）

『妙法蓮華経 陀羅尼品 第二十六』

（本門・流通分）

『妙法蓮華経 妙莊嚴王本事品 第二十七』

（本門・流通分）

○『又如来の滅度の後に、若し人あって妙法華経の乃至一偈・一句を聞いて一念も随喜せん者』

には、我亦阿耨多羅三藐三菩提の記を與え授く』（法師品 二〇二頁 終五行）

○『其の習學せざる者は、此れを曉了すること能わじ』（方便品 八十二頁 四行）

○「習学」の3つのステップ「聞解・思惟・修習」

○『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得たりと知れ』（法師品 二〇九頁 三行）

○『十分の一でも実践できれば、また一つでも徹することができれば、立派な精進』



<陀羅尼品のあらすじ>

【薬王菩薩が、『五種法師の行』を实践した時の功德を質問】——

【三六七頁 一行】『觀世音菩薩普門品』を拜聴した八万四千人の聴衆（ちょうしゅう）が、仏の智慧を得る誓いを立てると、薬王菩薩は座から立ち上がり、恭（うやうや）しく右の肩をあらわにして（古代インドの風習 / 相手を讃歎し敬意を表す作法）、釈尊に合掌して申し上げました。

【三六七頁 二行】「世尊よ。お伺い申し上げます。もし善男子・善女人がこの法華経を受持し、さらには読・誦・解説・書写を行ない、『五種法師の行』を修めたならば、どのような功德を得ることができるのでございましょうか。お教え願います」

【釈尊が薬王菩薩の問いに答える】——

【三六七頁 四行】すると釈迦牟尼仏は、薬王菩薩に仰（おお）せになりました。

「もし善男子・善女人が、ガンジス河の砂の数の八百万億那由他（なやた）倍という計り知れない

数の諸仏を供養したとしましょう。そなたはどう思いますか。その者が得る功德というものは多いと思いますか、少ないと思いますか」

【三六七頁 六行】薬王菩薩は即座にお答えしました。

「世尊よ。もちろん多いものと存じます」

【三六七頁 六行】それを受け、釈迦牟尼仏は仰せになりました。

（『乃至（ないし）一四句偈（いっしゅくげ）を受持し、讀誦し解義（げぎ）し説の如く修行せん、功德甚（はなは）だ多し』）「ところが、法華經の中の短い偈（げ）、たとえば四行で構成される『四句偈（しゅくげ）』をたった一つでも受持し、その教えの通りに実践したならば、その人の得る功德は、先の無数の仏を供養する功德よりも計り知れなく多いのです」

【『五種法師の行』の尊さに感動した薬王菩薩が、

法華經実践者の守護を決意。総持真言（そうじしんごん）を説く】——

【三六七頁 終三行】それを伺った薬王菩薩は、感激して釈迦牟尼仏に申し上げました。

「世尊よ。法華經を受持し、実践する『五種法師の行』を実践することの尊さがわかりました。

／（『我今當（われいままき）に説法者に陀羅尼呪（だらしゅ）を與（あた）えて、以て之（これ）を守護すべし』）

私は今こそ、法華經を受持・読・誦・解説・書写する『五種法師の行』の実践者を守護するために、『総持真言（そうじしんごん）あらゆる善を進め、あらゆる悪を止める神祕の言葉』を贈りたいと存じます」

【三六七頁 終二行】そして薬王菩薩は、神呪（じんしゅ）を唱えはじめました。

【三六七頁 終行】／【經典裏 八頁 二行・四八頁 二行】「安爾（あに／不思議よ）－ 曼爾（まに／思惟よ）－ 摩訶（まね／念することよ）
三 ～ 惡叉治多治（あしやちたぢ／教えに対する理解よ） 四十一 阿婆盧（あばろ／尽きることのない教えよ） 四十二 阿摩若 那
多夜（あまにや なたや／顧慮・こりよ することなく、法に従う自由自在の境地よ） 四十三」

【三六八頁 七行】この神呪（じんしゅ）を唱え終わると、薬王菩薩は申し上げました。

「世尊よ。この総持真言（そうじしんごん）は、ガンジス河の砂の数の六十二億倍という無数の諸仏が説かれたものです。／（『若（も）し此の法師を侵毀（しんき）することあらん者は、則（すなわ）ち爲（こ）れ是（こ）の諸佛を侵毀（しんき）し已（おわ）れるなり』）それゆえこの神呪（じんしゅ）に護（まも）られている法師を迫害する者がいるならば、その者は全ての仏を敵にして害を加えることと同じで、大きな過（あやま）ちを犯すことになります」

【薬王菩薩の決意を釈尊が讃歎（さんたん）】——

【三六八頁 終五行】すると釈迦牟尼仏は、薬王菩薩をお褒（ほ）めになられました。

「善いかな。善いかな。薬王よ。法華經を受持し、実践し、教えを広める者の身を案じて、それらの者たちを守護するための神呪（じんしゅ）・総持真言をよくぞ唱えてくれました。／（『諸（もろ）の衆生に於（おい）て饒益（にょうやく）する所多からん』）これによって必ずや、多くの衆生は豊かな利益（りやく）を得ることになるでしょう」

【**勇施(ゆうぜ)菩薩が、法華經実践者の守護を決意。総持真言(そうじしんごん)を説く**】——

【三六八頁 終二行】すると、**勇施(ゆうぜ)菩薩**が**釈迦牟尼仏**に申し上げました。

「世尊よ。私も法華經を受持・読誦する人たちを守護するために、神呪(じんしゅ)・**総持真言(そうじしんごん)**を唱えさせて頂きたいと存じます。そして法師(法を説き、実践する者)が**総持真言**を得ることで、夜叉(やしや)や羅刹(らせつ)、富単那(ふたんな)、吉蔗(きっしゃ)、鳩槃荼(くはんだ)、餓鬼(がき)などの鬼たちが、／『其(そ)の短(たん)を伺(うかが)い求むとも能(よ)く便(たより)を得(う)ることなけん』法師の弱点に付け込もうとしても、弱点をみつけられず、結局は何も手をつけることが出来ずにあきらめてしまうことになります」

【三六九頁 二行】そして、**釈迦牟尼仏**の前で神呪(じんしゅ)を唱えました。

【三六九頁 四行】／【經典裏 九頁 二行・四九頁 二行】「**摩隸(ざれ/光る炎よ) – 魔訶摩隸(まかざれ/大なる光の炎よ) – 郁呾(うつき/智慧の光明よ) ≡ ～ 旨緻梔(しちに/永住よ) + 涅槃埵梔(ねはんち/迎合しないことよ) + 涅槃埵婆底(ねはんち/無意味にあつまることがないことよ) + 三**」

勇施(ゆうぜ)菩薩はさらに申し上げました。

【三六九頁 六行】「世尊よ。この神呪(じんしゅ)・**総持真言**は、ガンジス河の砂の数ほどの無数の諸仏がお説きになったものであり、大なる歓喜によって発せられた神呪です。ですからこの神呪に護(まも)られている法師に迫害を加えるならば、／『則(すなわ)ち爲(こ)れ是(こ)の諸佛を侵毀(しんき)し已(おわ)れるなり』それは全ての仏に迫害を加える大罪を犯すことになります」

【**毘(毗)沙門天王(びしゃもんてんのう)が、総持真言(そうじしんごん)を説く**】——

【三六九頁 終五行】その時、**毘(毗)沙門天王(びしゃもんてんのう)**が**釈尊**に申し上げました。

「世尊よ。私も衆生を慰(あ)れみ、法華經を実践し、説き弘める法師を守護するために神呪(じんしゅ)・**総持真言**を説かせていただきます。

【三六九頁 終四行】そして神呪(じんしゅ)を奏上(そうじょう)しました。

【三六九頁 終二行】／【經典裏 九頁 四行・四九頁 四行】「**阿梨(あり/富裕よ) – 那梨(なり/踊る者よ) – ～ 那履(なび/貧者よ) 五 拘那履(くなび/全てを富ますにはおかぬ女神よ) 六**」

神呪(じんしゅ)を説き終え、**毘(毗)沙門天王(びしゃもんてんのう)**が申し上げました。

【三六九頁 終行】「世尊よ。この**総持真言(そうじしんごん)**は、法華經を実践し、説き弘める法師を守護するものです。そして私自身もまた、／『百由旬(ゆじゅん)の内に諸(もろもろ)の衰患(すいげん)なからしむべし』その法師(法を説き、実践する者)が住む百由旬(ゆじゅん/一由旬は峠一日歩ける距離 二里約8km、または峠の音が隔く距離1kmの8倍)以内の範囲内で一切の障(さわ)りがないように守護いたします」

【**持国天王(じこくてんのう)が、法華經実践者を守護する総持真言(そうじしんごん)を説く**】——

【三七〇頁 二行】その時、千万億那由他(なゆた)という計り知れない数の乾闥婆(けんたつば/鬼神)たちに取り囲まれていた**持国天王(じこくてんのう)**が、仏さまの御前(おんまえ)に進み出て恭(うやうや)しく合掌し、礼拝(らいはい)して次のように**釈尊**に申し上げました。

「世尊よ。私もまたこの神呪・総持真言を唱え、法華經の實踐者・法師を守護いたします」

【三七〇頁 四行】そして神呪（じんしゅ）を奏上しました。

【三七〇頁 五行】／【經典裏 九頁 終三行・四九頁 終三行】「阿伽師爾（あきゃね/無数の）－ 伽師爾（きゃね/有数福女神よ）＝ ～ 浮樓莎
梶（ぶろしゃに/順次説かれて行くことよ）_ハ 頰底（あっち/真理よ）_五」

【三七〇頁 六行】「世尊よ。この総持真言は四十二億の諸仏がお説きになったものです。もしこの神呪（じんしゅ）に護られた法師を脅（おびや）かす者がいたならば、／（『則（すなわ）ち爲（こ）れ是（こ）の諸佛を侵毀（しんき）し已（おわ）れるなり』）その者はすべての仏を害する大罪を犯すことになります」

【十人の羅刹女（らせつによ）と鬼子母神（きしもじん）が、総持真言（そうじしんごん）を説く】――

【三七〇頁 終五行】その時、法会（ほうえ）の中に数多くの羅刹女（らせつによ）／鬼女の意味（きじょのいみ）たちがいました。

第一は藍婆（らんば）、第二に毗藍婆（びらんば）、第三は曲齒（くく）、第四は華齒（けし）、第五に黒齒（くく）、第六は多髮（たほつ）、第七に無厭足（むえんぞく）、第八は持瓔珞（じようらく）、第九に皐諦（がい）、第十には奪一切衆生精氣（だついつしやうしやうけ）という名の鬼女（きじょ）がいました」

【三七〇頁 終三行】この十人の羅刹女（らせつによ）とともに、鬼子母（きしも）とその子たち、そして多くの家来たちが仏さまの御前（おんまえ）に罷（ま）り出て、声をそろえて釈尊に申し上げました。

【三七〇頁 終行】「世尊よ。私どもは、法華經を受持・読誦する者を守護し、あらゆる障（さ）りがないように擁護（ようこ）させていただきます。／（『若（も）し法師の短（たん）を伺（うかが）い求むる者ありとも、便（たより）を得ざらしめん』）もし法師（法を説き、實踐する者）を陷（おとし）れ、欠点をあげつらおうとする者がいたならば、その者たちが何もできず、着手の手掛（てか）かりすら見つけられないようにします」

【三七一頁 一行】そして仏さまの御前（おんまえ）で神呪（じんしゅ）・総持真言を唱えたのでした。

【三七一頁 三行】／【經典裏 九頁 終二行・四九頁 終二行】「伊提履（いでび/これに於いて）－ 伊提民（いでびん/ここに於いて）＝ 伊提履（いでび/これに於いて）＝ ～ 多醯（たけ/しかも立つ）_{＋七} 兜醯（とけ/害を加えず教をよく護持し）_{＋八} 觔醯（とけ/害を加えるものはない）_{＋九}」

羅刹女（らせつによ）たちは言葉を続けます。

【三七一頁 五行】／【經典裏 一〇頁 二行・五〇頁 二行】（『寧（むし）ろ我が頭（こ）うべの上に上（のぼ）るとも法師を惱（なやま）すことなかれ。若（も）しは夜叉（やしや）、若しは羅刹（らせつ）』）もし何者かが私たちの頭上に乗ることがあっても、それを堪（た）え忍びましょう。しかし法華經を實踐し、説く人を悩ますことだけは絶対に許しません。夜叉（やしや）、羅刹（らせつ）、餓鬼（がき）、富単那（ふたんな）、吉蔗（きっしや）、毗陀羅（びだら）、犍駄（けんた）、烏摩勒伽（うまろぎや）、阿跋摩羅（あばつまら）、夜叉吉蔗（やしやきっしや）、人吉蔗（にんきっしや）などの鬼どもが法師（法華經の實踐者）に取り憑（つ）き、一日、二日、三日、四日ないし七日、または常時、熱病で苦しませようとしても、私たちはそれを阻止（そ）し、法師を守護します。そればかりかその鬼たちが男の形や女の形になり、童子や童女の形となって法師の修行を妨（さまた）げ、／（『乃至（ない）夢の中にも亦復（またまた）惱（なやま）すことなかれ』）あるいは夢にまで出て来て悩ませようとしても、それを阻止し、守護します」

【三七頁 終行】／【經典裏 十一頁 三行・五一頁 三行】そして羅刹女(らせつによ)たちは、偈(け)を用いて釈迦牟尼仏に申し上げました。

【法華經の實踐者を悩亂(のうらん)する罪の深さを、羅刹女(らせつによ)らが示す】——

【(偈)三七頁 終行】／【經典裏 十一頁 四行・五一頁 四行】『説法者を悩亂(のうらん)せば 頭(こうべ)破れて七分になること阿梨樹(ありじゅ)の枝の如くならん 父母を殺(しい)する罪の如く 亦油(またあぶら)を壓(お)す殃(つみ) 斗秤(としょう)をもって人を欺誑(ごおう)し 調達(ちょうだつ)が破僧罪(はそうざい)の如く 此の法師を犯さん者は 當(まさ)に是(かく)の如き殃(つみ)を獲(う)べし』「この神呪(じんしゅ)・總持真言に背(そむ)いて、法華經を實踐し、説き弘める人を悩ます者は、その罰(ばつ)として枝(「花」という説もある)が地に落ちると七つに細かく割れる阿梨(梨)樹(ありじゅ)の枝(花)のように、頭がバラバラに砕(くだ)けるでありましょう。法の實踐者、法師を悩ます罪は、両親を殺す大罪と同じであり、油を搾(しぼ)り出す時、石臼(いしうす)にはびこる無数の虫たちを殺しながら石臼を引く罪(無数の命を殺めやめる罪)、または、人を悩まし、猜疑心(さいぎしん)を起こさせてしまう秤(はかり)や計算をごまかす罪、そして提婆達多(だいばだつた)が釈尊を殺害しようとして釈尊教団の和合を乱(みだ)した破僧罪(はそうざい)と同じ大罪にあたります。法の實踐者、法師を害する者は、以上と同じ大罪を犯(おか)したことになる、その罰(ばつ)を自らが受けることになるでしょう」

【三七頁 四行】偈(け)を終えた羅刹女(らせつによ)たちは、さらに申し上げました。

「世尊よ。私どもはこの教えを受持・読誦・修行する人々を、身を以て守護いたします。／『安穩(あんのおん)なることを得(え)、諸(もろもろ)の衰患(すいげん)を離れ衆(もろもろ)の毒藥を消(しょう)せしむべし』いつも法師が安穩(あんのおん)でいられるように、さまざまな心配や障(さわ)りが無いようにいたします。たとえ毒殺されようとしても、その毒をことごとく消して行きます」

【羅刹女(らせつによ)らの決意を釈尊が讚歎(さんたん)】——

【三七頁 六行】すると釈迦牟尼仏は、羅刹女(らせつによ)たちにお告げになりました。

「善いかな。善いかな。そなたたちは法華經を受持する法師を守護すると、よくぞ言ってくれました。その功德は計り知れないほど大きいものです。ましてや法華經を信受し、また、經典に花・香・首飾り、旗・天蓋(てんがい)などを供え、音楽を奏(かな)でて、あるいは乳の油による燈明(とうみょう)・植物油の燈明・さまざまな香油による燈明など百千種にのぼる燈明を灯(とも)して仏を供養する者を守護するならば、その功德はまことに甚大(じんたい)であります」

【三七頁 終行】「皁諦(うたい)をはじめとする羅刹女(らせつによ)やその家来たちよ。／『應當(まさ)に是(かく)の如き法師を擁護(おうご)すべし』そなたたちは、法華經の實踐者であり、法を説き弘める法師を守護していくのです」

【三七頁 終行】以上、この『陀羅尼品』を同った六万八千人の人々は、『無生法忍(むしょうぼうにん)』という境地、すなわちこの世は本来ただ一つであるという『空(くう)』の教えを究(きわ)め、現象世界のあらゆる変化に動じない絶対安穩の境地を得ることができたのでした。

ごしゅふほん
五種不翻

(P278・7行/P198・2行)

仏教経典を中国語に翻訳した人たちは、どうしても翻訳しないほうがよいと判断されたものは、原語の音(おん)に似た漢字を当ててすませ、わざと原語のまま残しておいたのです。これを〈五種不翻(ごしゅふほん)〉といいます。

①インドにあって中国にない動植物や伝承の魔物などの名。「迦楼羅・かるら、緊那羅・きんなら」など。②一語に翻訳すると原意が十分に尽くされないもの。「陀羅尼・だらに」など。③神秘的な言葉。秘密の語。「陀羅尼品の神呪」など。④昔からの習慣に従ったもの。「阿耨多羅三藐三菩提・あのくたらさんみゃくさんぼだい」など。⑤翻訳すれば、真の意味を失うもの。「仏陀・菩提」など。

ほうぼう ほうふく みずか つみ みずか ばつ
謗法への報復ではない。自らの罪は自ら罰せれる。(P321・終行/P234・2行)

羅刹女(らせつによ)たちが、法華経の敵に対する報復(ほうふく)を誓っているようですが、そう見てはいけないと思います。～徹底した寛容を説かれるお釈迦さまが、無条件に「善哉(ぜんさい)、善哉」とおほめになるはずがありません。～罰(ばつ)を「あたえてやろう」とはいわず、「得るであろう」と言っています。やはり、自らの罪によって自ら罰せられるという〈業・ごう〉の原理の通りの表現であります。このことをしっかりと理解しなければ、卑俗(ひそく)な見解に陥(おちい)りやすいですから、注意が必要だと思います。

《急難(きなん)のひととき ①》

「罰(ばつ)は誰が与えるのか…。仏は人を罰するような、人間と『相対的』な関係にあるものではありません。いうまでもなく自分自身です。自分の作った〈業・ごう〉が、自分自身のうえに現われてくるのです。やはり、自らの罪によって自ら罰せられるのです」と庭野開祖は説きます。

—— この庭野開祖の説示をどのように受け止めますか。 かみ締めてみましょう。

きし もじん
鬼子母神

(P314・1行/P227・6行)

鬼子母(きしも)というのは、ハーリーティー(訶梨帝・かりてい)という名の鬼女(きじょ)です。500人の子供を持っていましたが、大変残酷(さんこく)・邪悪(じゃあく)で、王舎城(おうしゃじょう)の町へ来ては人の子をとって食べていました。お釈迦さまがそれを教化する方便として、鬼子母の一人の子をお隠(かく)しになりました。子煩悩(こはんのう)の鬼子母は半狂乱(はんきょうらん)になって探しまわりました。そのときお釈迦さまが、「500人もの子供を持っていてもそのように悲しいのだ。おまえに子どもをとって食べられる親の身になってごらん」とおさとしになりましたので、はじめて非を悟り、すっかり仏教に帰依して、長く安産と幼子の守り神になろうという誓願をたてたのでした。

『説法者を惱亂(のうらん)せば 頭(こうべ)破れて七分になること阿梨樹(ありじゅ)の枝の如くならん 父母を殺(しい)する罪の如く 亦油(またあぶら)を壓(お)す殃(つみ) 斗秤(としょう)をもって人を欺誑(ごおう)し 調達(ちょうだつ)が破僧罪(はそうざい)の如く 此の法師を犯さん者は 當(まさ)に是(かく)の如き殃(つみ)を獲(う)べし』 (三七頁 終行/經典裏 十一頁 四行・五一頁 四行)

この総持真言に背(そむ)いて、法華經を説き、実践する人を悩ます者は、その罰として、地に落ちると枝(花)が七つに細かく割れる阿梨樹(ありじゅ)の枝(花)のように、頭がバラバラに砕(くだ)けるでありましょう。法の実践者を悩ますこの罪は、両親を殺す大罪と同じであり、油を搾(しぼ)り出す時、石臼(いしうす)にはびこる無数の虫たちを殺しながら石臼を引く罪であり、または、人を悩まし、猜疑心(さいぎしん)を起こさせてしまう秤(はかり)や計算をごまかす罪、そして提婆達多(だいばだつた)が釈尊を殺害しようとして釈尊教団の和合を乱(みだ)した罪と同じ大罪にあたります。法の実践者、法師を害する者は、この大罪を犯し、その罰(ばつ)を自ら受けることになるでしょう。

せっぽうじゃ のうらん つみ 説法者を悩乱する罪

(P319・2行/P232・2行)

法華經の説法者(実践者)を悩ます者の大罪。頭が割れ、親殺し、釈尊を殺す大罪と同じ。

《患(わづ)のひととき ②》

「法を説き、実践する者を悩ませる罪は、両親を殺し、釈尊を殺そうとした罪と同罪」だと。説かれています。じつは、「法座」での話を他に漏らし、その結果、法を実践しようと決意していた法座での発言者を悩ませ、傷つけるということは残念ながらあるようです。

つまり、『陀羅尼品』でいう説法者を悩乱する罪と、法座での話を他に漏らし秘密を守らない罪は、同罪」だとも言えます。—— あなたは、このことをどのようにお考えになりますか。



＜妙莊嚴王本事品のあらすじ＞

【釈尊が、妙莊嚴王(みょうしょうごんのう)の過去世の話をされる】——

【三七三頁 一行】多くの神々が、法華經を実践する者を守護するために総持真言(そうじしんごん)を説き、六万八千人の人々が、変化に動じない絶対安穩の境地『無生法忍(むしょうぼうにん)』を得た時、釈迦牟尼仏はすべての聴衆(ちようしゆ)に向かって、次のように仰せになりました。

「無量無辺不可思議(ふかしぎ) 阿僧祇劫(あそうぎこう) というのはるか遠い昔、雲雷音宿王華智仏(うんらいおんしゆくおうけちぶつ)という仏がおられました。国は光明莊嚴(こうみょうしょうごん)といい、時代の名は喜見(きけん)と言いました。その世界に妙莊嚴(みょうしょうごん)という一人の王がいました。そして夫人の名は淨徳(じょうとく)、息子の二人は淨藏(じょうざう)、淨眼(じょうげん)と言いました」

【三七三頁 六行】『是(こ)の二子(にし)、大神力・福德・智慧あって、久しく菩薩所行(しよぎよう)の道(どう)を修(しゆ)せり』「二王子は大神通力を持ち、福德(ふくとく)・智慧に満ちていました。これは長い間、菩薩行を実践した功德によるものです。そして布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の『六波羅蜜』を成就(じょうじゆ)し、人を正しく導く方便(へんぽう)に精通(せいとう)して、慈悲喜捨の『四無量心』

を具えていました。さらに六波羅蜜を補助する三十七の修行の道にも精通していました」

【三七三頁 終行】「また、この二人の王子は、心が清らかで、煩惱を完全に除いた『浄三昧(じょうさんまい)』や、太陽のようにすべてを照らす智慧を持つ『日星宿三昧(にっしゅうさんまい)』をはじめ、さまざまな三昧の境地に達していました」

【三七三頁 終行】「その時、雲雷音宿王華智仏(うんらいおんしゅくおうち ぶつ)は、妙莊嚴王(みょうしょうごんのう)を悟りへと導こうと考えられ、王や多くの人々の幸せを願って『法華経』を説くことになりました」

【浄蔵(じょうぞう)・浄眼(じょうげん)の二王子が母に対して、仏の供養を願う】——

【三七四頁 一行】「そのことを聞いた浄蔵(じょうぞう)、浄眼(じょうげん)の二王子は母の所へ行き／『十指爪(じっしそしゅう)を合せて白(もう)して言(もう)さく』両手を合わせて願い出ました。『母上。どうか雲雷音宿王華智仏(うんらいおんしゅくおうち ぶつ)のみもとへお出かけください。私たちもお供(とも)して、親しく仏さまのお側に罷(まか)り出て、供養・礼拝いたしたいと存じます。なぜならば、この仏さまは一切の天人(てんにん)や人間のために『法華経』をお説きになろうとされているからです。私たちもその教えを聴聞(ちょうもん)したいと存じます』と願ったのでした」

【三七四頁 五行】「すると母・浄徳(じょうとく)は子どもたちに言いました。『そなたたちの父は、仏法以外の教えであるバラモン教を篤(あつ)く信仰しています。そのため父王(ふおう)が仏法を聴聞(ちょうもん)することは容易(たやす)いことではありません。だからこそ、そなたたちから直接父王に申し出て、一緒に仏さまのもとへ行くようお願いしてはどうですか』」

【三七四頁 六行】「浄蔵(じょうぞう)と浄眼(じょうげん)の二人の王子は、合掌しながら母に申し上げました。『私たちは仏さまの子であるにもかかわらず、／『而(しか)るに此(こ)の邪見(じゃけん)の家(いへ)に生(うま)れたり』なぜこうして仏教とは違う信仰の家に生まれたのであろう』と嘆きました」

【父を教化するために、奇跡を現わすことを母が提案】——

【三七四頁 八行】「母・浄徳(じょうとく)は子どもたちに言いました。『そのように父を心配するのであれば、／『爲(ため)に神變(じんべん)を現(あらわ)すべし～心必(こころかなら)ず清浄(しょうじょう)ならん』父王(ふおう)が驚くような奇跡を現わしてごらんなさい。それを王さまがご覧になれば、頑(かたく)々な心がほぐれ、心穏(こころ おだ)やかとなり、私たちが仏さまの御許(みもと)へ行くのをお許しになるでしょう』と」

【二王子が、父の前で奇跡を現わす】——

【三七四頁 終行】「すると浄蔵(じょうぞう)と浄眼(じょうげん)の二王子は早速(さっそく)、父の所へ行き、父のことを思う心から、様々な奇跡を現わしたのでした」

【三七四頁 終二行】「そして二人は多羅樹(たらじゅ/椰子の木のような高さ約20m ある高い木)の七倍の高さにまで飛び上がり、／『虚空(こくう)の中に於(おい)て行(ぎょう)・住・坐(ざ)・臥(が)し、身の上より水を出

（いだ）し、身の下より火を出（いだ）し』 ①空中を歩き、とどまり、座り、横になって見せました。そればかりか、②頭上から水を吹き出し、足先からは火を出したかと思うと、今度は反対に頭から火を出し、足先からは水を出しました。また、③大空を覆（おお）い尽くすように巨大になったかと思うと、次の瞬間、豆粒のように小さくなりました。④空中にパッと姿を現わしたかと思うと、その次には大地に現れるのでした。⑤そして大地では水のように吸い込まれて行き、そして次には、水面を地面のようにして歩いて行くのでした。このような数々の奇跡を目にした父王は驚き、／（『其（そ）の父の王をして心淨（こころきよ）く信解（しんげ）せしむ』）王の心は清淨になって、子たちの神通力を心から素直に認め、感嘆したのでした」

【二王子の奇跡に父が感動。「師は誰か」と問う】——

【三七五頁 四行】「父王（ふおう）・妙莊嚴王（みょうしょうごんのう）は、王子たちの神通力の偉大さに感激し、これまでに経験したことのない感動と歓喜を覚えました。そして子どもたちに合掌して、思わず口にしました。／（『汝等（なんだち）が師は爲（さだ）めて是（こ）れ誰（たれ）ぞ、誰の弟子ぞ』）『そなた達の師は一体誰なのか？ 誰から教えを受けているのか？』と声をあげました」

【三七五頁 六行】「淨蔵（じょうぞう）と淨眼（じょうげん）の二王子は答えました。『大王よ。それは雲雷音宿王華智仏（うんらいおんしゅくおうち ぶつ）さまです。今、あの七宝に輝く菩提樹の下の法座に端座（たんざ）しておられるお方です。その仏さまはこの世の全ての天人や人間のために、広く『法華経』という教えをお説きになられます。その仏さまが私たちの師です。私たちはそのお方の弟子です』」

【三七五頁 終四行】「父王（ふおう）は言いました。『そうであったか。／（『我今亦（われいままた）汝等（なんだち）が師を見たてまつらんと欲す。共俱（とも）に往（ゆ）く可（べ）し』）それでは私もそなたの師にお目にかかってみたい。共に行こうではないか』と仏さまのもとへ行くことを願いました」

【二王子は父の感動を喜び、出家することを母に懇願（こんがん）】——

【三七五頁 終三行】「それを聞くと、淨蔵（じょうぞう）と淨眼（じょうげん）の二王子は小躍（こおど）りしながら空中から降りてきました。そして母・淨徳（じょうとく）の所へ駆（か）け寄り、合掌しながら申し上げました。『母上。おっしゃられた通り父上に、仏さまの偉大さをお解り頂くことができました。そして父上は、仏の悟りを願う心になりました。私たちは父上を仏道へお導きするという父上にとって極めて大切な一大事をなすことができました。誠に有難うございます。／（『願わくは母、彼（か）の佛の所（みもと）に於て、出家し修道（しゅどう）せんことを聽（ゆる）されよ』）この上は何卒お願いがございいます。私どもが出家し、仏道を修めることをどうかお許してください』」

【三七六頁 一行】「淨蔵（じょうぞう）と淨眼（じょうげん）の二王子は、重ねてお願いを申し上げました。『どうか私たちが沙門（しゃもん/出家僧）になることをお許してください。／（『優曇波羅（うどんばら）の如く佛に値（あ）いたてまつること復（また）是（こ）れよりも難（かた）し』）仏さまにお会いできるということは極めて稀（まれ）なことです。それはあたかも三千年に一度しか花を咲かせない優曇波羅華（うど

んばらけ)の開花に出会えるような、稀有(けう)なことです。この機会を逃せば再び仏さまに出会うことは極めて困難であると言えます。ですからどうか私たちの出家をお許してください』

【三七六頁 終六行】「すると母・浄徳は二王子に答えました。／(『汝(なんじ)が出家を聴(ゆる)す。所以(ゆえ)は何(いか)ん、佛には値(あ)いたてまつること難(かた)きが故(ゆえ)に』)『そなた達の出家を許しましょう。仏さまにお出合いできることは、極めて難しいことから・・・』」

【法華經に出会うことは、三千年に一度あるかの稀有(けう)の慶事(けいじ)】——

《盲亀浮木(もぎ ふぼく)の譬え》

【三七六頁 終五行】「すると浄蔵(じょうぞう)と浄眼(じょうげん)の二王子は心から喜び、両親に向かって申し上げました。『父上。母上。誠に有難うございます。どうかお二方とも雲雷音宿王華智仏(うんらいおん しゅくおうち ぶつ)の御許(みもと)に赴(おもむ)き、ご供養をなされて下さい。なぜならば／(『佛には値(あ)いたてまつること得難(えがた)し、優曇波羅華(うどんばらけ)の如く、又一眼(またいちげん)の亀の浮木(うきぎ)の孔(あな)に値(あ)えるが如し』) 仏さまにお出合いできるのは極めて稀(まれ)なことで、それは三千年に一度咲く優曇波羅華(うどんばらけ)の開花に巡(めぐ)り会うようなものです。または大海をさまよう浮き木の穴に、一眼(いちげん・片目)の亀が顔を偶然に出すような極めて低い確率で生じる稀有(けう)の出来事であります。このように稀有(けう)の出来事ですので、こうして今世、仏さまのご在世中に生まれることができ、しかも仏さまにお出合いできることは、誠に幸せなことであります。』」

— 《盲亀浮木(もぎ ふぼく)の譬え》 —

【二王子は出家を懇願(こんがん)】——

【三七六頁 終二行】「(『而(しか)るに我等(われら)、宿福深厚(しゅくふく じんこう)にして佛法に生れ値(あ)えり』) 幸いにも私どもは、前世において善業を積ませて頂いたために、今世、仏さまにお出合いさせて頂くことができました。／(『當(まさ)に我等(われら)を聴(ゆる)して出家することを得(え)せしめたもうべし〜諸佛には値(あ)いたてまつり難し』) 父上よ、母上よ、あとうか私達の出家をお許してください。仏さまにお会いすることは極めて困難であります。再びお会いできることは、なかなか難しいことです。ですから、出家をお許してください』と懇願(こんがん)し、決意を述べたのでした」

【三七七頁 一行】「その時、二王子の熱心な願いを伺っていた王に仕える八万四千人の女官(にょかん)たちも、全員が法華經を受持する固い決意ができたのでした」

【二王子と浄徳(じょうとく)夫人の徳分を紹介】——

【三七七頁 二行】「浄眼(じょうげん)菩薩は、『法華三昧』という法華經を完全に体得している境地を、遠い過去より具(そな)えていました。また、浄蔵(じょうぞう)菩薩は無量百千万億劫(おくこう)というはるかな昔から、『離諸惡趣(りしよあくしゅ)三昧』というあらゆる悪から離れ、清浄な心を保つ境地を得ていました。それも決して自分の解脱(げだつ)のためでなく、一切衆生を惡道から離れさせたいという心から発したものでした。また王妃(おうひ)である浄徳夫人(じょうとく ぶにん)は、『諸仏集(しよぶつ

しゅう)三昧』という諸仏の教えを完璧(かんぺき)に理解する境地を得ていました。そのために、／(『能(よ)く諸佛の秘密の蔵(ぞう)を知れり』) 諸仏の御心(みこころ)の奥にある深遠(しんえん)な教えまでも理解することができたのでした」

【妙莊嚴王が仏の御許(みもと)へ。仏を礼拝】——

【三七七頁 六行】「さて二王子は、先の神力・方便力によって父王(ふおう)は仏法を信解(しんげ)し、喜んで精進するまでになりました。そのため妙莊嚴王(みょうしょうごんのう)は多くの家臣を引き連れ、また淨徳夫人(ぶにん)は奥御殿(おくごてん)の女官(にょかん)や召使い(めしつかい)を連れ立ち、そして二王子は四万二千人の民衆を引き連れて雲雷音宿王華智仏(うんらいおん しゅくおうち ぶつ)の御許(みもと)に赴(おもむ)きました。一行は仏さまの御許(みもと)に着くと、額(ひたい)を仏さまの御足(みあし)に付けて礼拝し、仏さまの周りを三周して仏徳を讃歎(さんたん)し、その後、着座しました」

【雲雷音宿王華智仏が妙莊嚴王に対して法を説き、導く】——

【三七七頁 終三行】「その時、雲雷音宿王華智仏は、／(『王の爲に法を説いて示教利喜(じきょうりき)したもう』) 王のためにやさしい教えから順を追って法を諄々(じゅんじゅん)と説かれました。すると王は初めて触れた仏さまの教えに、大いなる歓喜を覚えたのでした」

【三七七頁 終二行】「そこで妙莊嚴王(みょうしょうごんのう)と淨徳夫人(ぶにん)は、仏さまに感謝の供養として首にかけていた高価な真珠の首飾りをバラバラに解き、その真珠を仏さまの頭上に散じました。すると真珠はたちまち虚空(こくう)に昇り、四本の柱を持つ美しい宝の台座となり、その台座には多くの宝と百千万の天の衣が敷(し)き詰(つ)められました。そしてその上に仏さまはお座りになり、結跏趺坐(けっかふざ)して端座(たんざ)し、全身からは大光明を放たれたのでした」

【三七八頁 二行】「その尊いお姿を拝した妙莊嚴王は感激しました。『何と素晴らしい徳相を具えた仏さまであろうか。このように嚴(おごそ)かで素晴らしい徳相を具(そな)えている方は他にはいない。最高第一の徳相を成就されている』と心から感嘆(かんだん)したのでした」

【雲雷音宿王華智仏が妙莊嚴王へ授記】——

【三七八頁 三行】「その時、雲雷音宿王華智仏(うんらいおん しゅくおうち ぶつ)は男女の出家・在家の修行者たちに仰(おお)せになりました。『そなた達よ。妙莊嚴王が今、私に合掌して立っている姿をどう見ますか。この王は私の教えに従って比丘となり、仏と成るべき様々な道を修めて、必ず仏となるであります。その仏の名は娑羅樹王(しゃらじゅおう)と言い、国は大光(だいこう)、時代は大高王(だいこうおう)と申します。娑羅樹王仏の御許(みもと)には、無量の菩薩や声聞などの修行者が居並(いなら)び、その国は平坦で美しい国であります。妙莊嚴王のこれからの精進による功德は、このように素晴らしい功德となって現われるのです』」

【法華経に感動した妙莊嚴王が出家をする】——

【三七八頁 終五行】「妙莊嚴王(みょうしょうごんのう)はただちに王位を弟に譲(ゆず)り、国政を任せました。

また王妃と二王子および多くの家臣たちは仏法に帰依し、出家の道を歩むことになりました」
【三七八頁 終四行】「大王は出家し、八万四千年の間、常に一心に『法華經』の教えに即して精進しました。その結果、多くの人々を救い切り、そのうえで何一つ報いを求めないという境地『一切淨功德莊嚴(いっさいじょうどくしょうん)三昧』を得ることができたのでした」

【三七八頁 終二行】「この三昧を得ると妙莊嚴王は多羅樹(たらじゅ/椰子の木のような高木・高さ約20m)の七倍の高さの虚空(こくう)高くに昇り、そこにとどまりました。そして雲雷音宿王華智仏(うんらいおんしゅくおうち ぶつ)に申し上げたのでした」

【父王が子に感謝と讃歎。我が家に生まれた因縁を説く】——

【三七八頁 終行】「『世尊よ。私を仏道に引き入れてくれたのはこの二人の王子です。この子たちが様々な神變(じんぺん)・奇跡を現わしてくれたおかげで、私の間違った信仰観を一変させ、仏法に安住するように導き入れ、そして、世尊にもお目にかかることができました。誠にこの二人の子は、私にとって善い友・善い指導者・善知識であります。／『世尊を見たとてまつることを得せしむ。此の二子は是(こ)れ我が善知識なり。宿世(しゅくせ)の善根を發起(ほっき)して、我を饒益(にょうやく)せんと欲するを爲(もつ)ての故に、我が家に來生(らいしょう)せり』」もとより私にも宿世(しゅくせ・すくせ)に積んだ善根があればこそ仏さまにお会いすることが出来たのでしょう。そしてこの二王子たちは、過去世に積んだ自分の善根(ぜんこん)の芽を出させ、私に豊かな利益(りやく)を与え、私を救うために、我が家に生まれてきてくれたものだと思います」

【二王子がこの家に生まれた因縁を雲雷音宿王華智仏が証明】——

【三七九頁 四行】「その時、雲雷音宿王華智仏(うんらいおんしゅくおうち ぶつ)は、妙莊嚴王に向かって仰(おお)せになりました」

【三七九頁 四行】「『その通りです。そなたが言う通りです。／『善根を種(い)えたるが故に世世(せせ)に善知識を得(い)』」信仰深い善男子・善女人は前世において善行を行なって来たからこそ、幾度(いくど)生まれ変わっても、善い友・善い指導者・善知識に出会うことができるのです。そしてその善き友・善き指導者・善知識は人々を仏道へと誘(いざな)い、やさしい教えから順を追って法を説いていき、仏の悟りへと導いていくのであります』と雲雷音宿王華智仏は言われたのでした」

【三七九頁 七行】「『妙莊嚴王よ。／『善知識は是(こ)れ大因縁なり』」善い友・善い指導者・善知識に出会えることは、尊い因縁あればこそです。そして、善い友・善い指導者の教化があるからこそ、私たちは仏を見ることもできれば、仏の智慧を得たいという発心(ほっしん)もできるのです』

【三七九頁 七行】「『大王よ。そなたの子である二王子をどのようにとらえますか。じつはこの二人は過去世に於いて、六十五百千万億那由他(なゆた)恒河沙劫(ごうがしゃ こう)という無数の仏のもとで恭敬(くぎょう)・讃歎(さんたん)し、／『法華經を受持し、邪見の衆生を愍念(みねん)して正見に住せしむ』」『法華經』をしっかりと受持してきたのでした。そのため誤った『ものの見方』をして苦しむ衆生を、正しい『ものの見方・正見(しょうけん)』が得られるように導けるのです。そなたが菩提心を起こせたのも、宿世(しゅくせ・すくせ)で修行を積んだ二人の子たちのおかげなのです』

【妙莊嚴王が雲雷音宿王華智仏を讃歎(さんたん)】——

【三七九頁 終二行】「それを伺った妙莊嚴王(みょうしょうごんのう)は虚空(こくう)から降(お)り立ち、雲雷音宿王華智仏(うんらいおん しゅくおうち ぶつ)に、『如来は全ての衆生を救う智慧と偉大なる徳分を具え持つ、稀有(けう)のお方です。それは仏の徳相にあらわれています。すなわち頭上の肉髻(にっけ)からは光明が発しており、目は長く広く、鮮(あざ)やかな紺青(こんじょう)の色をしておられます。眉間(みけん)の渦毛(うずけ)は純白で、白碼瑙(しろめう)の月の光のようです。齒は白く隙間(すきま)がなく綺麗(きれい)に並び、唇(くちびる)は美しい赤色をしている頻婆果(びんばか)という果実のようです』と申し上げ、讃歎(さんたん)したのでした」

【三八〇頁 二行】「妙莊嚴王は、雲雷音宿王華智仏の無量百千万億の計り知れない大徳を讃歎(さんたん)し終えると、仏さまの前に進み出て、一心に合掌して再び申し上げました」

【三八〇頁 四行】「『世尊の大徳(だいとく)は譬(たと)えようもなく偉大です。今までに聞いたことも見たこともない未曾有(みぞう)の大徳です。そして仏さまがお説きになる法は、甚深微妙(じんじん みみょう)の救いの力を持ち、／『教戒(きょうかい)の所行(しょぎょう) 安穩快善(あんのおん けぜん) なり』その教えと戒めの実践は決して、窮屈(きゅうくつ)に感じることなく、心安らかに実践できます。雲雷音宿王華智仏(うんらいおん しゅくおうち ぶつ)よ。／『我今日(こんにち)より復自(またみずか)ら心行(しんぎょう)に隨(したが)わじ、邪見・憍慢(きょうまん)・瞋恚(しんに)・諸惡の心を生ぜじ』本日より私は、迷いの心に引きずられることはありません。間違った考え・おごり・うぬぼれ・怒り・怨(うら)み、その他もろもろの惡の心を起こしません。このことを固くお誓いします』と申し上げ、そして仏さまを深く礼拝して法会(ほうえ)の場から退出したのでした」

【妙莊嚴王や二王子が、誰であるかを釈尊が明かす】——

【三八〇頁 七行】釈迦牟尼仏は聴聞(ちょうもん)の大衆に向かって仰(おお)せになりました。

「そなた達はどのように思いますか。じつは妙莊嚴王こそ他にもありません、先の『妙音菩薩品』で妙音菩薩の因縁を私に尋ねた華徳菩薩その人です。また淨徳夫人(じゆにん)は、今、私の前にいる光照莊嚴相(くわうしょうざんそう)菩薩であり、妙莊嚴王とその一族・家臣たちをあわれんでこの世に生まれたのであります。そして、妙莊嚴王の妃(きさき)となったのであります。また二人の王子は、現在の藥王菩薩・藥上菩薩その人であります」

【三八〇頁 終二行】「この藥王・藥上の二菩薩は、無量百千万億という無数の仏の御許(みもと)で人々を救う徳行を積み重ね、そして計り知れない甚大(じんたい)な功德を成就(じょうじゆ)することができたのでした。ですからこの二菩薩の名前を聞いた者は、その者が人間であろうと天上界の人々であろうと、二菩薩の尊い徳分を心から礼拝しなければなりません」

【三八一頁 二行】釈迦牟尼仏が妙莊嚴王の前世の話である『妙莊嚴王本事品』を説かれると、八万四千人という多くの人々は／『遠塵離垢(おんじんりく)して、諸法の中に於て法眼淨(ほうげんじよう)を得たり』煩惱・罪惡(さいあく)から離れることができ、あらゆる出来事を見る目が清淨となる『法眼淨』を得ることができ、実相を直観的に見通すことができるようになったのでした。



かてい しんこうじっせん しどうてきたちば もの しんこう
家庭での信仰実践と指導的立場の者の信仰

(P327・1行/P239・1行)

この品では大変現実的な、身近な問題について説かれています。❶『**家庭における信仰の問題**』です。～ つぎに❷『**指導的立場にある人の信仰の問題**』です。～ ひろく世に尊敬されている指導的立場の人の信仰は、～ 必ず多くの人々に影響を与えずにはおれないものです。

ぶつしつせいかつ せいしんせいかつ
「物質生活」より「精神生活」

(P328・7行/P240・4行)

何の不自由も不足もない王家の子息が出家することは、**〈物質生活より精神生活の安らかさが、はるかに勝っている〉**を語っているのです。～ **〈精神生活の転換〉**という意味です。

し むりょうしん
四無量心

(P333・7行/P244・6行 第2巻P265・2行/P201・1行)

- 【慈】— 人を幸せにしてあげたいと思う心。
- 【悲】— 人の苦しみを抜いてあげたいと思う心。
- 【喜】— 人の喜びを共に喜ぶ心。
- 【捨】— 人に施した恩も、人から受けた害や怨(あた)も忘れ、一切の報いを忘れる心。

じんべん
神変とは

(P343・1行/P252・2行)

この神変(じんべん)というのは、**〈子どもたちの生活態度の、びっくりするような変わり方〉**を意味するのです。そのような現実を見れば、どんな頑固な父でも、必ず心がほぐれてくるはずですよ。

(P345・3行/P254・3行)

- ❶【空中を歩き、座り、寝る】⇒仏法によって『**空**』を悟れば、自由自在になる。
- ❷【頭や足から、水・火を噴き出す】⇒『**一念三千**』。己の一念で現象は変わる。
『三界は唯心(ゆいしん)の所現(しょげん)』と同義。
- ❸【虚空を覆う巨大。次に豆粒のように小さく】⇒『**人間の本質と現実**』の両面を知る。
『**本仏と一体**』となる。一方、自分は小さな人間。
- ❹【空中で消滅。忽然(いつぜん)と地上に現われる】
⇒『**空**』を知るだけでなく『**現実**』を踏まえる。
現実を踏まえて生活を正していく。
- ❺【地に入ること水の如く、水を歩くこと地の如く】
⇒仏法を悟った者は、『**人を自由自在に教化**』。

子^こに向^むかって親^{おや}が合^{がっしょう}掌

(P348・3行/P256・6行)

『時に父～ 合掌して子に向って言いわく』 (三七五頁 四行)

父は(子どもたちの神通力の偉大さに感動して)～合掌して子どもたちに尋ねました。

父が子に向かって合掌したことに、よく注目しなければなりません。～ それにしても、子に
対して手を合わせるというのはなかなか出来ることではありません。誠に尊い光景であります。

《患^{わづ}惟^いのひととき ③》

「子に対して手を合わせるというのはなかなかできることではありません」と庭野開祖は指摘します。—— 子に対して手を合わせるのみならず、配偶者に対して手を合わせる。目下の人に対して手を合わせる。このことについて考えを深めたいと思います。
あなたは如何でしょうか? かみ締めてみましょう。

理^り想^{そう}論^{ろん}だけでは世^よは救^{すく}えない

(P351・終4行/P259・7行)

理想論ばかりでは世の全ての人を救うことはできません。まず『方便』をもって教えに引き寄せなければならぬ人が、たくさんあるのです。むしろそういう人の方が多いでしょう。

～ インテリの人にしても、理論と同時に現証(げんしょう)を見せられれば、ますます強くその教えに引き付けられるでしょう。まして一般の人の関心と呼ぶには、何よりも現実の証拠(げんじょう)を見せることが必要です。

一^{いち}眼^{げん}の亀^{かめ}の浮^う木^{きぎ}の孔^{あな}に値^あえるが如^{ごと}し

(P359・終5行/P265・終3行)

「盲亀(もうき)の浮木(ふぼく)、優曇華(うどんげ)の花咲くに会う思い…」というセリフが、芝居や講談でよく用いられますが、法華経が、日本の文化、生活にどれほど沁(し)み込んでいるかが分かります。～ 一眼の亀が大海に浮いている木にうまく会うことさえ大変な難事なのに、その木にあいている小さな穴を見つけ、それに首を入れて休息するというのですから、これはまったく難事中の難事といわなければなりません。

示^じ教^{きょう}利^り喜^き

(P366・4行/P271・4行)

【示・じ】 教えのあらましを示すこと。

【教・きょう】 理解の準備ができれば、もう少し詳しく教えの意味を説く。

【利・り】 教えを實踐して得られる功德を説く。實踐させて利益(りやく)を味あわせる。

【喜・き】 教えを受持することに喜びを感じ、生きがいを覚える。

いんねん 因縁あればこそ

(P378・4行／P281・4行)

ましてや父母・兄弟として生まれ合わせたり、(夫婦・めおと／となったり) 仲の良い友達となったり、あるいは一緒に仕事をしたり、善知識として自分を精神的に導き、人格完成へと誘(いざな)ってくれる人に会うことは、並々ならぬ因縁があればこそです。いわゆる〈大因縁〉であります。それを思えば、父母・兄弟・親類・友人・師弟・同僚等々、親しく接する人々、さらには同信の仲間を決して疎(おろそ)かにしてはならないという仏さまの教えが、しみじみと納得できるのであります。

《^{しゆい}思惟のひととき ④》

釈尊は「前世において善行を行って来たからこそ、幾度(いくたび)生まれ変わっても善い友・善い指導者・善知識に出会うことができる (『善根を種(う)えたるが故に世世(せせ)に善知識を得(う)』)」(三七九頁 五行)。また「尊い因縁があったからこそ出会うことができるのです『善知識は是(こ)れ大因縁なり』(三七九頁 七行)」と説かれています。

— 今世、尊き仏縁と結縁(けちえん)したこと、または、庭野開祖、庭野会長と出会えた自分自身の因縁を、あなたはどのように受け止めていますか？ かみ締めてみましょう。

《^{しゆい}思惟のひととき ⑤》

並々ならぬ因縁、〈大因縁〉があればこそ、親子・夫婦・兄弟・同信の仲間・同僚・友人となったのだと庭野開祖は説いています。

親子や兄弟、家族、そして仲間たちとは、この〈大因縁〉によって結ばれたということを、あなたはどのように受け止めますか？ かみ締めてみましょう。

きせき いみ 奇跡の意味

(P390・2行／P291・5行)

(二王子が奇跡の現象を現したことは) 仏法を学び、信することによって、人格が一変し、したがって日常の行ないがすっかり変わったことを意味しているのです。

じっしょう だいいち 実証によるみちびきが第一

(P390・終4行／P291・終5行)

人を仏の教えに導くには、相手に応じて平易に、あるいは専門的に～納得のいくように説明してあげることが必要です。しかし、それよりも手っとり早いのは身をもってする実証です。自分自身が仏法を信じ行なうようになってから、このように変わったのだという生きた事実を見せることが第一です。～ 日夜一緒に生活している家庭内の者には、日常の一挙一動(いっきょいちどう)に現われる小さな変化も敏感に感じとられるものです。

※「徳教は、耳より入らずして目より入る」福澤諭吉『修行立志編』

かぞく 家族をみちびくには

(P392・6行/P292・終3行)

家庭内の人を仏の教えに導くには、いくら教えの内容を説明し、理論的に納得させても、本人の生活態度がかわらない限り、なかなか効果のあがるものではありません。～ 家族を導くことは、やさしいようで一番難しいことだと言えましょう。

《^{しゆい}思惟のひととき ⑥》

家族を導くことは一番難しいこと。日常の一挙一動(いっきょいちどう)に現われる小さな変化を敏感に感じとられる家族に対して、家庭内での法の実践は難しいこと。本人の生活態度が変わらない限り、なかなか効果のあがるものではない。と庭野開祖は説きます。

—— この説示、あなたはどのように受け止めますか。かみ締めてみましょう。

※家での父・開祖に、次男の欽司郎氏は「お父さん、『後ろ姿』で私たちを導いてくれてありがとう」と言ったところ、庭野開祖は、「お前たちがそう思ってくれることは、それはそれで有難い。しかし私は一度たりともお前たちを『導こう』と思って実践したことはない。ただ、家で教えの通り実践しているにすぎない」と答えた。

※『道場観』『即ち是れ道場なり。諸佛此に於て阿耨多羅三藐三菩提を得〜』 法を実践する場所が、仏が悟った場(ブツガヤ)、法を説く場(サルナート)、涅槃の場(クシナガラ)となる。――> 即ち『聖地』となる。

こころ ^{しゆっけ} 心の出家

(P396・終行/P295・終3行)

妙莊嚴王・夫人・二王子その他が出家したことは、仏法によって煩惱から解脱したことを出家という行動に象徴してあるのです。いわゆる〈心の出家〉です。

しどうてきたちば ^{ひと} ^{しんこう} 指導的立場の人の信仰

(P397・6行/P296・2行)

指導的立場にある人が正しい信仰にはいった場合、その影響がどれほど大きなものであるか、～ その人の人格は必ず多くの部下の人たちに良い影響を与えます。

まとめ

(P399・6行/P297・8行)

【妙莊嚴王】→ 権勢者・指導者の真理(妙法)に対する態度の模範。

【二王子】→ 子の親に対する信仰開眼の方法を示す。

【浄徳夫人】→ 真理に対して 進歩的な者と保守的な者との中間に立つ者の態度の手本。

《^{しゆい}思惟のふいかえり まとめ》

今日の『陀羅尼品第二十六』と『妙莊嚴王本事品第二十七』の学びを通して、何を学び取ったか？(または、何を一番強く感じ、受け止めることができたか?) 振り返ってみましょう。

合 掌